

## 南方（その他）

トラック島

南の孤島の楽園も戦場だった

富山県 笹倉 正久

〔昭和十八年九月二日〕

第五十二師団柏兵団動員下令。

市役所の吏員が家に来て「おめでとうございます」  
と一枚の赤紙を差し出した。召集令状と印刷された、  
たった一枚の赤紙を受け取った私は、町内の大勢な方  
たちの見送りを受けて歩兵第六十九連隊第三中隊に応  
召した。

私は鳩班に配属され、練兵場の隅で鳩の訓練が毎日

の日課となった。

毎日鳩を訓練をしていたある日、道の松並木の下に  
じっと、こちらを見て立っている女の人がいる。よく  
よく見るとその姿は母だ。「母さん」と呼べずにただ  
手を振って応えた。私の家は連隊から四キロほどの所  
にあったので、だれから聞いたのか毎日通ってくるよ  
うになった。

〔十二月十六日〕

営庭に整列した部隊は静かに営門を出発した。しか  
し部隊が営門を出るのにラッパが鳴らないまま、隊列  
はいつもと違った道を進んで行く。今まで出征兵士を  
沢山見送ったが、いつも私の家の前で左折して駅に向  
かい、途中で家族としばしの面会時間もあったのに、  
今回は違う。面会もなく、駅の電灯も暗く消されてい

た。ただ防諜のためだった。

軍用列車に詰め込まれて、鎧戸を閉めて外界を見ることも禁止され字品の軍用ホームに着く。連日二交代の昼夜兼行で弾薬、食糧の荷役作業を行った。

〔十二月二十四日〕

師団の全員は次の各船に乗船完了して、対空、対潜監視強化される中、見送りのない岸壁から静かに出港した。

第三吉田丸 第一大隊

妙義丸 連隊本部、第三大隊の一部

日昌丸 砲兵第一中隊、工兵隊、他

第三名映丸 第三大隊

駆逐艦 二隻 軍旗、旗護衛兵

対潜監視でマストに上ると豊後水道は燦々と太陽の光に照らされて、どこで戦争が行われているのか、と考えるほど静かな青い海に見とれていると、はるか前方に白い波が立って見えた。船舶の監視員が、あれが潜水艦の潜望鏡の航跡で、我々の監視員教育に就いているのだとの説明を受ける。

〔十二月二十八日〕

わが部隊の行く先は南洋群島トラック島と初めて発表された。

冬の中部太平洋は次第に荒れ狂って、波と波の頭を飛び魚が飛んで行く。真っ黒な雨雲と海の境界が見えないほど大きなうねりとなって、我が船団を翻弄する。そんな中、私が対潜監視に当たった。第三吉田丸の監視台上立っていた。大きなうねりの上に乗れ、うねりの谷に船が下りたとき、前を行く船団が全く影も形も見えなくなる。前も後もただ大きな真っ黒い海だ。うねりの上下に揺れるときは、まるでエレベーターに乗っている感じがした。また、横に揺れたときは自分の立っている台は船体の外に、海の上にある。右に左に海の上にはうり出される感じで、いまにも船と共に太平洋の海底に沈んで行くような錯覚に襲われるのだった。

船内は灯火管制で薄暗く、蒸し暑いので、沢山の船酔いした者が食事もしないでいる。昨日は船団の通過した付近に敵の潜水艦が出没したと情報が入る。船内

では待避訓練が度々行われた。

〔昭和十九年一月一日〕

四方拝、荒れ狂う中部太平洋上、遙かに皇居を遙拝し、歩兵第六十九連隊の武運長久と必勝を祈願する。

しかし、船酔いのため甲板に出た兵の顔色には全く生彩のない者が多かった。

〔一月七日〕

嵐も無事乗り切り、穏やかな海が戻ってきた。水平線の彼方にかすかな島影が見えた。しかし油断できない港の入り口近くに敵の潜水艦が待機していて魚雷攻撃をしてくると聞いていた。それでも何とか無事に環礁の間に開いている北水道を通過したのは十一時二十五分だった。

連合艦隊だ。「戦艦大和」がいる。「武威」もいる。

その他の艦船一九隻がその威容を見せている。そんな艦隊の間を我ら陸軍を乗せた輸送船が進んで行った。

この時にはだれもが我が海軍健在なりと信じていた。

トラック諸島はグアム島とポナペ島の中央に位置して、周囲を世界最大の環礁（ラグーン、直径約五〇キ

ロ）に囲まれた美しい島で、環礁内外に大小九〇もの島がある。島いっぱい椰子の木が海岸まで生い茂り、マングローブの間に島民の小屋も見えた。大きな島にはバナナ、パイヤ、パン、マンゴー、シャシャツプなどの果実が実っている。菜園の感じがする。

陸軍部隊は夏島、春島、秋島、冬島（四季島）の他に月曜島、火、水、木、金、土、日の七曜島などに分散して、毎日三〇度以上の日射の中で陣地の構築に汗を流していた。

我が中隊は一旦、夏島に上陸したが、数日で水曜島に移動した。ここでも毎日陣地の構築と防空壕掘りだった。そのころ私が物凄い下痢と発熱で海軍野戦病院（まだ陸軍野戦病院は開設されていない）へ入院することとなった。

〔二月四日〕

ソロモン群島「コロンバンガラ」に基地を持つ米軍のB24一機はトラック諸島上空に飛来し「我微弱ナル対空砲火ヲ侵シテ、トラック島偵察ニ成功セリ」と基地に報告して立ち去る。

〔二月十七日 未明〕

空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り渡る。しかし、海軍野戦病院には防空壕は無かった。我ら陸軍が上陸するなり急ぎ陣地や防空壕、トーチカ等を構築するのを見て「何でそんなものを造る、我ら海軍がいるかぎり敵は近づくことはない」と笑っていた。突然の空襲警報で病院の高い床下に隠れたり、私らのようにバンやマンゴーの大木の下に寄り添う者もいた。

アメリカ第五十八機動部隊（空母九、戦艦六、巡洋艦一〇、駆逐艦二八、潜水艦二〇）第一次トラック島攻撃である。爆音が近づく、急降下する、急上昇していく、バリバリバリと機銃掃射。マンゴーの木陰から目の前の海に浮かぶ貨物船が攻撃されている様子がはっきり見える。船舶兵が突っ込んでくる敵機に機関銃で対抗している。敵機はしつこく代わる代わる爆撃と機銃で攻撃してくる。

貨物船の周りに大小の水柱が次から次と立っているとき、爆発音がして船全体が真っ黒い煙に包まれてしまった。その煙が風で吹き飛ばされた後の水面に薄黒

く物凄い泡が吹き出している。轟沈、聞いていたけれど、初めて目の前でこんな悲惨な光景は、五十年たった今もありありとよみがえってくる。一瞬の間にあの大きな船体が海の中に消えてしまったのだ。おそろしく、あの勇敢な船舶兵も貨物船の船員も船と共にいまだにあの海底に帰国もできずに眠っているのだ。この日は終日爆撃が続いた。

〔二月十八日〕

朝から空襲警報で目を覚ます。昨日と同様、上空で激しく空中戦が始まり、握りしめている掌はじっとり汗で濡れていた。今日も終日爆撃が続いて、我が方の地上施設、船舶の損害は、沈没艦船四三、飛行機二七〇機、損害艦船九、燃料、糧食の損害大、死傷者六百名（郊外沈没船の乗員は含まず）。最近、現地を訪れた慰霊団の報告では、いまだに船舶や墜落した飛行機の残骸がそのまま放置されていると聞いています。

〔二月十九日〕

我々の隊は夏島に第二小隊、水曜島は第一小隊と分かれて警備に当たった。

幸い、私のA型パラチフスも回復し、本隊に復帰できた。

〔三月〕

敵機、連日連夜来襲して焼夷弾を各地に投下し、糧秣倉庫、野戦病院、基地建物、民家などほとんどが失われた。私が不寝番に立っていた時のことだった。近くの石鹼工場の小屋から灯がもれているので近づいて覗くと、工場の主人がランプの前にあぐらをかいてラム酒を飲んでいた。「明かりが漏れるから漏れないようにしてください」と言葉を掛けると、「兵隊さんご苦労さんです。私はもう生きる楽しみがないから、ほっておいてください。さ、こちらへきていっばい飲みませんか」。勿論勤務中なので断わった。彼が語り出したので、つい立ち去ることもできずに聞き入った。

「内地に帰る最後の船便だったので、奥さんと子供たちを乗船させ、長年稼いだ全財産を持たせて、明日出港という時に、あの爆撃で船と共に沈んでしまいました。こんなことならここで皆と暮らしていたらよかったです」と涙を流しながら語るのだった。私には返す言葉

も、慰める言葉も出なかった。「兵隊さん、こんな愚痴をよく聞いてくれてありがとう、少し休みます」と灯を消した。きっと私に泣き顔を見られたくなかったのだろう。

〔四月〕

我が分隊は重油タンク付近の警備に当たった。春島（現在、モエン島と呼ばれている）に飛行場を建設するので私が行くこととなった。ここには防空壕がないので、各自タコツゴを掘っておいた。

〔四月二十九日〕

米国機動部隊、第二次トラック島大空襲

我々の建設していた飛行場などはB24爆撃機の大編隊の攻撃にされされて、大小の穴が隙間もなく並んでしまった。翌三十日にも熾烈な爆撃が続く。

任務が終えて分隊に帰ってきて驚いたことに、分隊長と戦友が壮烈な戦死をしたことを知らされた。戦友の亡くなった地に行ってみた。たった三〇メートルの間に無数の爆弾の穴ができていた。もし春島の建設に行っていなかったら私も戦死していたことだろう。

このころには船舶の輸送も完全に途絶えた。航空機がせめてもの連絡手段と、俸給を全部郵便に託したのだった（留守宅に送った郵便為替は届いていなかった）。そんなころ、すでに制空権は米軍の手中にあって、トラック島は手足をもぎ取られたも同然だった。こんな状態となり、特に食糧事情も逼迫してきた。

〔六月十五日〕

秋島に転進した第二小隊に連絡と製塩所（ドラム缶を二つに切った窯に海水を張り、マンガローブを燃料にして塩を作る）の連絡に行った。島から島への連絡船に乗ってしばらく周りの景色に見とれ、こんな静かなと、いつか、うとうととしていた。

突然、爆音が聞こえたと同時に、けたたましくサイレンが鳴り出した。船が全速力で対岸に向かって進む。まだ海の半ばだ、早く対岸にと気がせくが、どうしようもない。先ほど船に乗った棧橋が爆撃されている。船は棧橋にぶつかるように接岸した。全員飛び出し近くの防空壕に転がり込んだ。入り口近くにいたので、そっと覗いて見ると、対岸の棧橋は爆弾の攻撃で濛々

と黒煙を上げている。

攻撃機は艦載機ばかりだ。爆撃の合間を走って製塩所に辿り着いて用件を済ませた。すると今度は、ズシーン、ズシーンと腹の底まで響く音がし始めた。秋島の山に登り第二小隊に到着して見たものは、英国機動部隊の艦砲射撃の物凄い火柱だった。環礁のすぐ近くに巡洋艦四、英空母二が夏島を目標に火を吹いている。危ない、敵の作戦は艦砲射撃の後、上陸攻撃に移ると聞いていた。しかし私には腰に下げた短剣だけだった。確かにこの時は心細い思いだった。幸いに機動隊は立ち去ったので本隊に帰って見ると兵舎はばらばらに吹き飛ばされていた。その後も毎日定期的に空襲があった。

〔七月七日〕

サイパン島守備隊玉砕の知らせが入る。

そのころより爆撃はますます激しくなる。炊事に配属され、さつま芋と葉っぱの混ぜた食事で、食事とはいえない。芋の葉っぱを摘んでくるのは栄養失調になった兵の作業だった。畑にさつま芋を植え付けていくの

は元気のいい者で、空き地があればどんな小さい場所でも芋畑にした。畑に葉っぱがなくなるときは道端の柔らかい草の葉を摘んできて茹でて食べた。

畑の作業に行くとき、必ず缶詰の空き缶を腰にぶら下げ、手には一メートルほどの八番鉄線を持って行く。芋畑によく鼠が出る。芋を食べに出るのである。真っ黒に焦げた鼠の皮と内臓を取り出して塩を振りかけて食べるのだ。蛋白質のない食事はばかりで、これがないより栄養となり、気持ち悪くて食べない者は栄養失調になりやすいと、皆が争って鼠取りをするのだ。

空腹に耐えかね夜中に芋畑に入り、芋盗っ人を見つけたら監視員は拳銃を発砲してもよいと許可が出てから、夜中にパーン、パーンと音が聞こえるようになった。

たまたま、鯉の配給があって島民を連れ受領に行った。途中で空襲警報で避難していると海上を飛んでいる敵機が地上からの対空射撃で命中した途端、機体はちりぢりに分解して、白い煙の中から破片がひらひら

と舞っていた。空中分解を初めて目撃したその瞬間、言葉も出ないでじっと見つめながらも、あの煙の中からパラシュートで脱出した兵士が見えないかと、固唾を飲んで待ったが、ただ破片がばらばらと落下するだけだった。勝っている米軍の中にもこんなにして死んでいく兵士もいた。

〔七月十一日〕

連日の激しい爆撃に我が隊にまたも三名の壮烈な戦死者が出る。また同時刻、第一大隊本部に派遣されていた二名の戦死者も出た。

〔七月二十一日〕

米軍グアム島上陸。

〔七月二十三日〕

米軍テニアン島上陸。

〔八月十日〕

グアム島守備隊玉砕。いよいよ次はトラック島だと覚悟して気を引き締めた。

炊事でのことだ。食事の準備で釜の下に火が付いて盛んに燃えていたそのとき、いつものように空襲警報

のサイレンで炊事の兵や島民を近くの防空壕に待避させて、私一人いざという時に備え、バケツに水を張って釜の前に立って火の様子を見つめていた。

頭の上にバリ、バリ、と音がした。バケツの水を蹴飛ばすようにして釜の上を飛び越え、体を横に長くして伏せた。またもや爆音と同時に機銃掃射でトタン屋根を突き破り、伏せている体の上に、バラ、バラと土が崩れ落ちてきた。山を崩した所に釜を据えたのでとっさにその間に飛び込んだのだった。九死に一生、頭から全身土の中に埋まっていた。

毎日の爆撃で、敵さんの爆撃時間が定期的になり、それから時間を見計らって火を付けることにした。しかし爆撃はますます激しくなり、記録によると三月から九月までにB 24、B 25、延べ約三、七〇〇機来襲した。夜昼なしで防空壕へ出たり入ったり眠ることもできず、皆疲れ切っていた。

今日も大爆撃で轟々爆音を聞いたので、防空壕に避難し入り口で監視していると、編隊は少し方向を変えた。「アツ竹島が狙われている」案の定、爆撃が始まっ

た。ヒューン、シュー、ズシン。繰り返し爆撃が続いた。長い長い時間のよう思えた。警備に当たっていた第一小隊の無事を祈った。敵機が去ったので防空壕の外に出て驚いた。竹島の飛行場は爆弾の痕で滑走路が完全に破壊された。飛行機は勿論全滅した。

山に生えていた沢山の椰子の木が一本もなくなってしまうって丸坊主の赤土の山になっていた。爆撃の物凄さを見せつけていた。幸い、第一小隊に死傷者が一人も出なかった。

我々陸軍は水際作戦として上陸してくる敵に備えて海中に障害物を作ったが、これも島に現在残っている物資を使って考えたものだった。しかしこれが大変効果があったことが後で判明した。それはドラム缶の中に石を詰め倒れないようにトロッコとレールで繋ぐといったことだった。これが上空から機雷に見えたので、敵はトラック島の上陸を断念したと聞いた。しかし真偽のほどは分からないので、我々の笑いの種になっている。

〔八月十五日〕終戦



全員に集合の連絡あり。雑音ではっきり聞き取れないが、陛下の震えるような低い声で詔勅の言葉が流れ続ける。「堪え難きを堪え……」の一言で体から一度に力が抜けていく感じだった。全員ただ無言。神風も吹かなかった。

〔八月二十三日〕

占領軍上陸する。武装解除。兵器、弾薬海中投棄。  
米軍宿舎建設。

〔十二月十八日〕

トラック島出港。「さらばトラックよ、またくるまでは」自然に歌い出した。米国のLSTに乗船。

〔十二月二十四日〕

小笠原父島に着いて日米合同クリスマス音楽会をLSTの甲板で開く。

〔十二月二十八日〕

遙か彼方に富士山の白い峰が見えると、全員甲板に出てきて船酔いも吹っ飛んでしまった。神奈川県浦賀に上陸して大豆御飯に添えて出された大根の塩漬けが懐かしい日本の味だった。いまでも懐かしんで、毎年

家で漬けて味わっている。

〔十二月三十一日〕

召集解除。復員列車を待つ間、上野公園に座り飯盒の御飯を食べ始めたところへ、薄汚れた着物を着た年輩の女の人が、無言のまま手を差し出すので、飯盒の御飯を掌に乗せると嬉しそうに一粒も残さず食べる姿が母の姿にだぶって見えた。

夕方列車に乗り込んだが、窓硝子の割れたところがあったり、座席が壊れていたり大変なもので、割れた窓に天幕を張ったり、寒いので空の飯盒の中に携帯アルコールを灯したりして暖を取った。

〔昭和二十一年一月一日元旦〕

やっと富山駅に近くなった。えっ！ホームに着いたが何も見えない。富山が戦災で全焼したと聞いたが、こんなに焼けてしまったとは思いもしなかった。見渡す限り真っ白く雪が積もっていて、富山の街は全部消えてしまっって跡形もない。

駅から真っ直ぐ歩けば家があると思っていたが、全くの焼け野原になっていた。大和、電話局、県庁が見

える程度だった。

知人を頼りに家族の落ち着き先に着いたころは、真暗に日が暮れていた。狭い家に落ち着いた。兄夫婦（兄は先に復員していた）と子供たちがいて、父がいた。狭いながら家族がいた。弟はまだ復員していなかった。父がローソクに火を灯している。簡単な台に位牌が並んでいるのだった。母と姉の子供たちの位牌が並んでいる。こんなことになっているとは思いもしなかった。

私ら兵隊は戦地に行くとき、死を覚悟で出征していった。しかし、それは国を守る、家族が安全に生活できる国にするため、だったのに。内地にいた家族がこんな無残なことに遭っていたとは考えもしなかった。あの練兵場の松並木の下で見た母の姿が最後になってしまった。

姉の子らは育ち盛りで空腹だろうと、手もつけずに大切に持ち帰った乾パンを嬉しそうに食べる顔を見るのが楽しみだったのに位牌に備えることになった。位牌の前に座りいつまでも離れることができなかった。

横に並んでいた父も、苦勞して建てた家が一夜のうちに灰になり、その上母まで亡くしたり、可愛い孫たちも亡くしてしまったのである。

「焼跡の街中を、毎日毎日捜し回ったが、遺体を見付けることができなかった。黒焦げになった屍が八月の炎天下に物凄く臭い、吐き気がする。神通川の川原一面に並べられた沢山の遺体集積所を何回も繰り返し探し回った、が見つからなかった」

そういつて話してくれた父は、げっそりとやせた手で合掌するのだった。せめてもう少し早く、十五日早く戦争を止めていたら助けられたのにと、繰り返す言葉をいつてまた目頭を押さえた。

こんな無残な戦争は絶対してはならない、絶対に。